温故知新メディア散歩

一人一人の古典

― 責任編集・扇谷正造『一冊の本』―

前号に続き＜週刊誌の鬼＞と異名をとった扇谷正造が手がけた本を紹介したい。
エッセイクラブ賞を受賞した執筆者を中心とした本書は、発行から半世紀近くになるのに少しも色褪せない。（菊地実）
※今回は、扇谷が取り上げた執筆者にフォーカスしてお届けします。

十年一昔

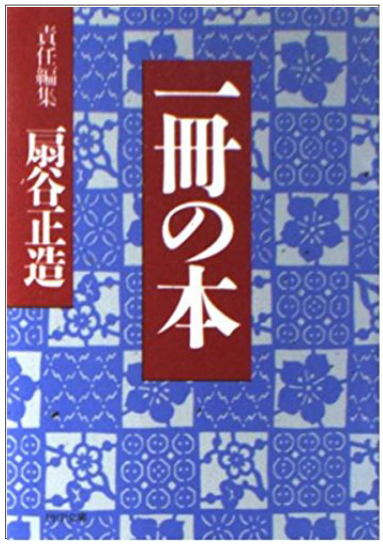
私も「一冊の本」はないが「一本の映画」と問われ、結構困ったことがある。一万数千本以上見た映画の中から一本と言われても、その時の気分や年齢によって変化する。当時は素晴らしく思えたのに十数年後再見したらつまらなく感じたり、逆にこんな深い意味があったのかと再評価する作品も少なくない。

本書は昭和五十一年発刊され、五十四年まで六刷。昭和六十一年に文庫本化され、それぞれに扇谷が序・あとがきを書いている。文庫本・序で「十年一昔というが・・・三十二名の執筆者のうち十人の方がお亡くなりになっている」と時の無情さに触れている。

合計三十二人の執筆者は作家・俳人・演劇人・学者・マスコミ関係者・財界人と錚々たるメンバーでジャンルも幅広い。手練れた書き手揃いで私もその著作に馴染んでいる人もおり、興味津々で一気に読了した。

専門あるいは非専門か

ロングセラー『零の発見』（岩波新書）で知られる吉田洋一（数学者、北大・立教大教授）はポアンカレ『科学の価値』を挙げ、「ポアンカレの透き通るような考え方」を絶賛している。翻訳より原書の方がわかりやすいというのもさすが！のちに吉田教授はポアンカレの翻訳も手がけている。吉田教授の『函数論』をはじめとする数学書はわかりやすいと、評判をとった。かって仏文学は



＜PHP文庫＞

ヴァレリーに代表される明晰・簡潔だったが七十年代からの仏文関係者は難解さを振り回す悪い癖がついた。

松本重治（同盟通信編集局長・国際交流センター理事長）は、米歴史家ビァード『わが共和国』。樋口敬二（名大教授）は恩師・中谷宇吉郎『雪』を挙げ、なぜ自分が氷の研究に入ったか「私には大学はない・・・中谷研究室に入学した」（136頁）と熱く語る。婚約者にも読ませたというのが微笑ましい。川田順造（文化人類学者）はレヴィ・ストロース『悲しき熱帯』を挙げており、＜なるほど＞とうなずける。

人生の転機

一方、理系（科学者）で専門外の文学書を挙げる人も注目される。

執筆者三十二人の中で唯一お目にかかったことのある菊池誠（ソニー中央研究所長・物理学・半導体）は父の書斎にあった夏目漱石集から『行人』を挙げ、セミナーで反論する質問者に「人間への興味を離れた管理など、私には意味がありません」（27頁）と言い切っている。

お魚博士としてその著作に親しんだ末廣恭雄（東大教授・水産学）はトルストイ『光あるうちに光の中を進め』を読み、このことが遠因となって数年後に受洗したと信仰告白している。

一冊を考察

『一冊の本』を考察する筆者もいる。扇谷の同業者・高原四郎（毎日新聞）は「恥ずかしながらそんな本を持っていない・・・持ちたいと思ったことはある」（210頁）仕事で週一冊の読書欄で紹介する羽目になった経緯を書いている。

早大教授・鳥羽欽一郎（経営学史）は「一冊の本を取らぬことの弁」として「一冊の本を探す時期を失ったために、いまだに一冊を求めている」（145頁）と遍歴の騎士ばりの論を展開。

痛快・愉快な筆者

読んで愉快だったのは作曲家高木東六。「概して音楽家は、作家や学者と比較してひどくボキャブラリーが貧しい」（59頁）として、『モーツァルト・ソナタ曲集』と楽譜をあげる。「頑固で気むずかし屋のベートーヴェンではいつも怒られているみたいで・・・ショパンやシューマンなどでは、甘いロマン性が強すぎる」（60頁）、「モーツァルトの音楽性は、ある部分の強調ではなく、柔らかに淀みなく、こんこんと永久に湧き出る泉のような・・・清純で無邪気な法悦」（62頁）と絶賛する。そんな高木も学生時代は「モーツァルトなんかちっとも偉くない」と思っていた事も面白い。

痛快なのは『呉清源特別棋戦』（毎日新聞）と碁譜を挙げている畑正憲。「呉清源が碁石の流れは切ないほどの必然姓を有している・・・若さをほしいままにして、石が高いところで踊り・・・」（218-219頁）と形容詞も高ぶっている。この当時の将棋・碁観戦記は川端康成をはじめ文豪が担当し、読みどころ満点で新聞の一大売物でもあった。当然棋譜が分かるには相当な棋力が必要で、ムツゴロウ先生は「五段」の強豪。

意外ながら＜なるほど＞と納得させられたのは林修三（大蔵省・元内閣法制局長官）が挙げている『風と共に去りぬ』。正宗白鳥の書評、戦前・戦中・戦後の三回の熟読。特に戦後読書感想は「北部諸州が南北戦争後に敗北した南部諸州に課した戦争責任者の追放、南部の従前の生活様式を無視した北部体制の押し付け・・・戦後の我が国の・・・占領軍当局と類似している」（170頁）と指摘。本作品の通俗小説扱いや映画の影響でメロドラマとして捉えがちなことをやんわりと批判している。

本書は昭和五十一年初版だけに戦争体験がらみの話も多く、興趣に尽きない。

【訂正】

1) 前号3頁「メディア散歩」／右側の最終行
「三十年になる。」が欠落していました。

2) 前号3頁「メディア散歩」／左側・最初のパラグラフ
2行目からの花森安治の部分で、「大日本翼賛会外部団体での国策コピーづくり」と書きとばしましたが、難波功士『撃ちてしやまむ』（講談社　メチエ選書）によると、翼賛会宣伝部に所属、さらに報道技術研究会のメンバーとして活躍していた。詳細はダヴィッド社「戦争と宣伝技術者」。戦後の広告・宣伝・イベント・建築・写真の錚々たる名前が出てくる。1970年大阪万博の人脈にも連なっていることに驚かされる。

■書誌／　扇谷正造 責任編集、1976（昭和51）年初版、PHP文庫1986年11月刊行